

編集後記

わたしが修行した道場の老師さまは、今年で八五歳になるのだろうか。長年の坐る生活から「足が痛い痛い」とはおっしゃってますが、お元気です。すでに隠居生活ですが、それでも夏は三時、冬は四時に起床の生活。そんな生活をずうっと続けている。妻帯しているわけではなく家族もおられない。外出もそう多くはない。四季の変化があるとはいえ、単調です。単調だから、時々生活にアクセントをつけるのが上手な方です。

たとえば、数ヶ月にいちど、愛用のお茶碗を変える。あるいは、机の向きを変える……。頻繁に変えては迷いですが、絶妙の問合いで変えて、生活のリズムを調整しているように見えました。生き方の名人です。

ところで、皆さんにお届けする、寺報のスタイルを少し変えてみました。

お盆号までは、A3版見開きの普通の体裁でした。今回は、ご覧のような具合です。「読みにくい」と思い乍らも、この編集後記までたどりついて読んでくださってありがとうございます。

封筒も色やデザインを時々かえています。いつも同じ封筒で同じ葉書の方が、ちよつと見ただけで「寺からだ」とわかるから「変えないで」、なんて声も聞きます。

仏教のメインテーマの一つに「無常」があります。すべてのものは、常に変化して、なにひとつ永遠なものなどありはしないと、仏教は教えます。だから変えている、というわけではないのですが、寺からの便りを受け取って「変えたな」とにんまりしてくれる人もいます。思い、貧弱なアイデアをひねり出しています。中身が薄いから、外見からはたまに着替えないとね。

新年早々の 余計なおしゃべり

前にも書きましたが、数年前から、伽羅（キャラ）や沈香（ジンコウ）などの香木が高騰しています。なぜかという、パリの香水に飽きたアラブのお金持ちが買い占めているから。それにもめげずに松岩寺の本堂では上質な沈香を焚いているからご法事の時など、香りを楽しんでください、と書いたことがあります。

高値にめげたわけではないのですが、最近には白檀（びやくだん）の粉末や丁子（ちようじ）・桂皮（けいひ）・竜腦（りゅうのう）などの薬香もときどきゆらしています。

桂皮と書いてもなじみがないけれど、シナモンといえはわかるでしょうか。八角も中華料理の香料で英語ではスターアニス。地中海沿岸にはアニス酒というリキュールがあって、その香料といえはわかりになる方もいるのでは。

さて、本尊さまやお仏壇にお茶をお供えますが、正式には左側にお茶、右側はお湯です。お湯といっても白湯ではなく、薬湯です。どういふものかという、丁子や八角などの香料をお湯でと

いだものです。「良薬は口に苦し」といっけれど、飲むのはご遠慮したい代物です。でもなんで、そんなものをお供えるのか。

昨秋、COP10という国際会議が名古屋でひらかれたという報道がありました。COP10って、先進国は世界中の動植物で新しい薬などを作って利益をあげているから後進国にも還元しなさい、という会議でしょう。たとえば、モンゴルの八角を使って、スイスのメーカーがインフルエンザ治療薬・タミフルを作っているとか……。

へえー、毎朝本堂の香炉で焚いている八角からタミフルは作られているのか。昔の人はそれを知っていて、本尊さまや亡き方に薬をお供えしたんだ。

病気は薬で治す、という仏教の考え方が、薬湯というお供えからわかります。だから、信ずれば病が治るとか拝めば良くなる、といった宗教には近づかないほうがいい。（住職記）

みなさんへのお知らせで、少しは気の利いたことを書かなくてはと、「ことば探索」とか「仏事ひとくちメモ」とか、いろいろタイトルをつけて短文を書いてきました。でも、どのシリーズも長続きしたものはありません。そこで始めた「いっぷく紹介」の三回目です。

いっぷく紹介

松岩寺は昭和20年の戦災でほとんどの建物と仏具を焼失してしまいました。現在あるものはかろうじて焼け残ったものか、先々代と先代がそろえたものです。その中から、興味深い墨跡の一幅を機会をみつけて、紹介していきます。



西湖山 正四位 山岡鉄太郎 32×117

の漢和辞典・諸橋大漢和辞典で調べても「西湖山」という熟語はありません。もしかしら、この書はもともとは「西湖山〇〇寺」というお寺にあって、それが流れながれて松岩寺にあるのかもしれない。

ところで、さいきん読んだものに鉄舟と勝海舟のつぎのようなエピソードが紹介されていました。

明治維新に活躍した山岡鉄舟が死の床に着いていよいよという時、勝海舟が見舞いにやって来たというのです。海舟が見舞いに来てくれたというので、鉄舟は床の上に正座して迎えた。しばらく互いの眼を見つめあっていたが、海舟が、いよいよだぞうだな、と言つと、鉄舟は、そのようだと答えた。また、しばらく沈黙があつて、「ではお静かに……」

そう言つて、海舟は去つていったとか。死にゆくものをこのように自然に送ることができたなら、いや、こんなふうには死んで行けたら、どんなに心安いことだろうか。

（中島教之著「死にぎわからの進一歩」『在家仏教』誌所収）

これは名人達人のなせる技だから、凡人にはほど遠い心境だけれども、そんな方の書だと思つてもう一度見上げてみると、ますます力強く迫ってくるのです。